
池田を巡る恋愛。

海田 陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

池田を巡る恋愛。

【Nコード】

N7296C

【作者名】

海田 陽介

【あらすじ】

就職採用試験に落ち、おまけに彼女にまで振られてしまった彼女は途中まで続けていた就職試験の勉強を中断して借りていたビデオを返しにレンタルショップに行く。そこで池田は思いがけず、高校の頃、密かに憧れていた藤崎さんと再会して・・・。

偶然の再会

不幸にも、公務員採用試験の不採用通知が届いたのと、彼女に振られてしまったのは同じ日だった。だから、池田はどうしようもなく落ち込んでしまった。あー、と叫びだしたくなるくらいだった。試験に落ちてしまったのも仕方がない。彼女に振られてしまったのもまあ仕方がない。でもよりもよって、ふたついつぺんに起こらなくなつていいじゃないか、と池田は思った。

自棄になつて、「なんでやねん」と叫びながら携帯を床に叩きつけると、携帯は壊れはしなかったものの、その画面にヒビが入ってしまった。それを見て、池田は猛烈に後悔した。そしてもう一度、「なんでやねん」と、目頭に涙を滲ませながら呟いた。

悪いことというものは重なるものらしい、と池田は苦渋の気持ちで学び取った。気分転換に音楽でも聞こうと思って、最近出たばかりのBZのアルバムをミニコンポでかけてみた。でも、それを聞いていてもちつともよくないどころか、ただうるさいだけだった。池田はうんざりした気分で、そのかけていた音楽を止めた。

さすがにさつきの携帯の件で学習していたから、自棄になつてミニコンポを叩いたりするようなことはなかったけれど、しかし、ムシクシヤした気分はどうしようもなかった。それで何か当たれるものはないだろうかあたりを見回していたところ、池田の視線はさつきまで整理していたアルバムの写真の上に止まった。

そこに写っているのは、高校の頃からずつとつき合いのある友達の顔だった。それは以前、みんなで集まって飲んだときに撮ったものだった。眼鏡をかけて楽しそうに笑っているその友達の顔を見て

いると、池田は意味もなくムシヤクシヤしてきた。それで池田は写真のなかの男に向かって、「泉谷のアホ」と、言ってみた。すると男は一瞬、写真のなかで不服そうにその表情を歪めたような気がしたけれど、もちろんそれは気のせいだった。

俺は一体何をやっているんだ、と池田は思った。我ながら自分のやっていることがアホらしくなってきた。ほんとうはこれから次の公務員試験に向けて勉強するつもりだったのだけれど、こんな気持ちではとても勉強なんて手につきそうにもなかった。池田は諦めてちよつと外に出ることにした。この前借りていたビデオを返しにいかねければならない用事もあつたし、ちよつと良い機会だと判断した。

家を出ると、あたりはもうすっかり暗くなってしまっていた。池田は試験勉強をしていたので、このところずっと朝夜が逆転した生活を送っていた。だいたい夕方五時頃に目覚めて、それから次の日の十一時頃まで活動するといった生活サイクルだった。

愛車のラブフォーに乗り込み、走り出す。この車は、学生の頃に苦労して手に入れたものだった。まだいくらかローンが残っていたけれど、もうすぐでそのローンも終わるはずだった。

池田は実家住まいだったから、フリーターの身であっても、家賃や駐車場代のことを気にする必要がなかった。まあ、大学を卒業しているにもかかわらず、実家のお世話になっているというのもあまり居心地の良いものではなかったけれど、しかし、公務員になるという目標のためには取り敢えず仕方がなかった。

池田は大学を卒業してから、アルバイトをしながら公務員を目指すという生活を送っていた。普通に社会人をやりながら公務員を目指すという手もなくはなかったけれど、しかしそうするととなると相当涙ぐましい努力をしなければならなかったし、だいたいそんなことをやっていたらいつになったら公務員になれるかわかったものではなかった。

これは池田が実際に勉強しはじめてわかったことなのだけれど、公務員試験というのはかなり難易度が高く、よっぽど身を入れて勉強しない限り、その試験を突破することなんてまずできないものなのだ。だから、池田は比較的に自由な身でいられるフリーターをやりながら、公務員試験の勉強を続けていた。

実際のところ、池田はもう既にいくつか結果を出していた。それでもまだ勉強を続けているのは、他に本命があるからだった。…最も、その本命のうちのひとつが、今日無惨な結果に終わってしまったわけなのだけれど。

車のなかではドラゴンアッシュのアルバムを聴いた。彼等の歌は常にポジティブなエネルギーに満ち溢れていて、池田は聴いていて元気が湧いてくるような気がした。今日みたいに口クでもないことが立て続けに二回も起こった日には、彼等の音楽に耳を澄ませて、そのポジティブなエネルギーを少しでも自分の気持ちのなかに補給したい気がした。

池田はしばらく音楽に耳を傾けていてから、ふとあることを思い出した。この音楽を作っている人間と自分は同じ年なのだ。彼等がこうやって日本のミュージックシーンに燦然と輝いている一方で、今の自分はいかなものだろう、と池田は思った。…一年半つき合

つていた恋人に振られ、おまけに第一志望だった就職先まで落としてしまった。人間は生まれながらして不公平にできていると誰かが言っていたような気がしたけれど、まさにその通りだよな、と池田は感じた。

ああ、これから俺の将来はどうなっていくのだろう、と池田は一瞬暗澹たる思いに駆られた。でも、慌てて首を振り、いや、まだまだこれからやねん、と自分に言い聞かせた。第一もう既にいくつか内定はもらっているのだ。そんなに将来を悲観する必要はないだろう。

それにまだ俺は24なのだ。その気になりさえすれば努力次第で何だってできる。まだまだいくらでもやり直しはきく歳じゃないか。そうだ、俺は絶対やったんねん、やったんねん、やったんねーん、と、池田は心のなかで取り憑かれたように繰り返した。

借りていたビデオは、北野武の「ドールズ」という映画だった。その映画は池田にとって久しぶりのヒットだった。見ているだけで涙が溢れてきそうになるその色彩の美しさや、作品全体に流れる悲哀感が、池田のなかでたまらなくフェイバリットだった。ぐっとくるね、と池田は思った。

借りていたビデオを返してしまうと、池田は取り敢えずという感じで店内をぶらついた。せっかくここまで来たのに、そのままとんぼ返りしてしまうというのも何だかもったいないような気がした。しばらく店内に置かれている様々なビデオを見て回ったけれど、あ

まり池田の感心を惹くようなビデオは見当たらなかった。

さて帰ろかな、と思ったところ、池田の視線はふとアダルトビデオのコーナーに止まった。そういえばここ最近アダルトビデオなんて全然見ていないような気がした。久しぶりに借りてみるのも悪くないよな、と池田は思った。

何しろ就職試験に失敗して、彼女にまで振られてしまったのだ。アダルトビデオを一本ぐらい借りたからといって、べつにバチは当たらないだろうと思った。というか、それくらいのが許してもらえないようじゃ、世の中あまりにも救いがないじゃないか、と池田は弁解するように思った。

アダルトビデオのコーナーに入って行こうとしたところで、背中から、「池田くん？」と、呼び止められた。

ふと振り返ってみると、そこには藤崎さんが立っていた。池田はかなり驚いてしまった。

彼女は、池田がまだ高校生だった頃に、密かに憧れていたひとだった。彼女に告白しようかどうか思いつめながらぼんやりと白でできなかったことを、池田は彼女の顔を見つめながらぼんやりと思いついていた。心のなかにそのときの感情が鮮やかに蘇って、池田はあれからもう何年も経っているというのに、ドキドキしてしまった。

「やっぱり池田くんや」と、藤崎さんはいくらか頬を輝かせて言った。「久しぶりやな」と、彼女は続けて言った。「おお、久しぶりやな」と、池田は答えたけれど、その声は緊張のせい、ちょっとぎこちない感じに震えてしまった。

「池田くんに会うのは同窓会のこと以来よな？」と、藤崎さんは言った。池田は少し考える振りをしてから、「そういえばそうやな」と、答えた。

池田は、実は最後に藤崎さんに会ったときのことを明確に覚えていた。大学三年のときに高校の同窓会があつて、そこで藤崎さんとは一度顔を会わせていた。

でも、そのときは他の友達に囲まれて、ろくに話すこともできなかった。二言三言交わすだけで精一杯だったような気がした。実はあのときから自分は藤崎さんのことがまた気になりだしていたのかもしれない、と、いま池田はそう直感するように思った。

…池田は他の誰かとつき合っている、藤崎さんのことをたまに思い出してしまうことがあつた。そんなふうに思ったりすることは、そのときつき合っていた恋人に対して失礼じゃないかと思つたけれど、でもそれは池田本人の意思ではどうすることもできないことだった。

藤崎さんはそんな池田の思いを知ってか知らずか、ふっと視線を斜め上に上げると、可笑しそうにその口元を綻ばせた。

「もしかして池田くん、あれ？エロビ借りにいくところやつたん？」

そう訊かれると、池田としてはもう笑うことしかできなかった。

池田は開き直って、「そうやで」と、答えた。

「ほんまによかったん？」と、藤崎さんは車の助手席に乗り込みながら言った。

「べつにわたしに気使わへんくてもいいんやで。わたし、男のひとがそういうの借りるのって全然気にならへんし……」

「いや、べつにな」と、池田は車のエンジンをかけながら言った。

「俺もそんなにエロビデオが借りたかったわけじゃないからな」

池田は藤崎さんの手前もあって、結局ビデオを借りるのは止めることにした。

「そんな無理せんでもいいで」と、藤崎さんは笑いながらからかうように言った。つられるようにして池田も笑いながら、「いや、ほんまやで」と、答えた。「ただビデオを返しにきたついでにちょっと見ていこうかなって思ってただけやねん」

「ほんまに？」と、言って藤崎さんはまた笑った。

「ほんま、ほんま」と、答えながら池田は車を走らせた。

立ち話というのもなんだし、これからご飯でも食べに行こうという話になった。といっても、この近辺にはご飯を食べるようなところなんてなかったから、じゃあという話になって、池田の車で出掛けることになった。

レンタルビデオ店まで、彼女は自宅から自転車であっていた。

「でも、大丈夫なん？」と、池田は車を心地よいスピードで飛ばしながら訊いた。

もう夜の十時を過ぎているせいか、車道に車の姿は少なかった。街灯の光がオレンジ色に街を染めていた。

「何が？」と、藤崎さんは池田の方を振り向いて尋ね返した。池田

は、「いや…」と、口ごもってから、「明日、仕事とか大丈夫なんかなって思ってたな。…もう結構遅い時間やし」と、言葉を続けた。すると、藤崎さんは、「それやったら大丈夫やで」と、答えた。「わたし、明日、久しぶりの休みやねん」

でも、そう答えた彼女の声は、心なしか寂しげに感じられた。池田は少し疑問に思ったけれど、でも結局何も訊かなかった。代わりに、「何の仕事してんの？」と、尋ねてみた。すると、彼女は今シヨップの店員をしているのだと答えた。

彼女は大学四年のときにみんなと同じように就職活動した。彼女が目指したのは、マスコミ関係の仕事だった。昔からそういう仕事に憧れていたのだ、と彼女は語った。でも、結局そこには受からず、半ば妥協するような形で、今の服飾関係の会社に就職した。まあ、接客は嫌いじゃなかったし、服飾の仕事にもある程度興味はあったから、といいわけするように彼女は言った。

「どうなん？仕事は楽しいん？」と、池田が試しに訊いてみると、彼女は窓の外に視線を向けて、「どうなんやろ」と、少し弱い声で答えた。「楽しいときもあるんやけどな…」と、彼女は迷うように答えてから、「でも、上司とかうるさいしな、売り上げのこととか気にせなあかんかったりでな…何か色々大変やねん」と、疲れを帯びたような声で続けた。

「…そうなんや」と、池田は頷いた。何と言ったらいいのかわからなかった。池田の回りの友達も大学卒業と同時に働いていたけれど、みんなそれなり大変そうにしていた。みんなの話を総合すると、池田の就職に対するイメージはあまりパツとしなかった。

「池田くんは今何してんの？」と、藤崎さんが改まった調子で尋ね

てきた。池田は少し迷ってから、「今、フリーターしてんねん」と答えた。それから池田は自分の事情を彼女に話して聴かせた。

自分も大学四年のとき就職活動したのだが、結局行きたいところに行けず、途中で公務員を目指すことに変更したということ。そしてそれから一年半勉強して、今いくつか内定をもらっているということ。これからまだいくつか本命の試験が残っているということ。今日その本命うちのひとつがダメになってしまったということも、べつに話す必要はなかったのだけれど、つい勢いで話してしまった。

池田の話聞き終わったあとで、藤崎さんは、「そっか。公務員かー」と、納得したように頷いた。「確かに、公務員やつたらある程度好きなように時間を使えるもんね。…公務員のひとそれぞれなりに大変やろうけど、でも、一応定時で帰れるし、ちゃんと土日休みもらえるし」

池田はその言葉に頷いてから、「俺は趣味に生きることにしてんと、冗談交じりに答えた。すると、藤崎さんは可笑しそうに少し口元を綻ばせた。それから、彼女はふっと表情を消すと、「わたしも公務員になれば良かったんかな」と、ちよつと寂しそうな声で言った。

信号が赤に変わって、池田はブレーキを踏み込んだ。オレンジ色の光に照らされた街は、妙にひっそりとして感じられた。

藤崎さんが話したこととそれから

車を三十分程走らせたあとで、結局、環状線沿いにあつた「ガス
ト」というファミリーストランに入った。池田としてはもつとオ
シャレな感じの店にしたかったのだけれど、何だか途中で探すのが
面倒になってしまったのだ。

席に着くと、ふたりは取り敢えずという感じで、トリンクバーを
オーダーした。それから池田はハンバーグとライスのセットを注文
し、藤崎さんはしばらく迷ってからパスタを注文した。

店内には平日の夜遅い時間帯ということもあつてか、人影は少な
かった。男女が入り混じつた学生ふうの集団がちらほらいるくらい
だった。

しばらくすると、注文した料理が運ばれてきた。料理はべつに不
味くはなかったけれど、かといって美味しいわけでもなかった。

店に入ってから、藤崎さんとは色々なことを話した。高校の頃の
思い出話や、そのときの共通の友達が今何をしているかということ
や、大学時代がどうだったということや、最近見た映画のことまで、
とにかく思いつくままに色々なことを話した。藤崎さんと話すのは
楽しかった。何しろ久しぶりだったし、話題が尽きることはなかつ
た。そして当然のように、話題は恋愛の話へと移っていった。

池田は、実は今日、自分は振られてしまったばかりなのだという
ことを、彼女に話して聞かせた。厳密に言えば、池田が彼女に振ら
れてしまったのは今日ではなかった。この前のデートの帰りだった
でも、そのとき池田は彼女に対してもう一度考え直してみてくれな

いかと言った。あっさりと別れを受け入れるほど、池田の彼女に対する気持ちは簡単ではなかった。

池田の言葉に対して、彼女はわかったと答えた。そしてそれから一週間が経った今日、彼女から電話がかかってきて、やっぱり別れたいと告げられたのだった。理由を尋ねてみたけれど、べつに理由と呼べるほどのものはないみたいだった。ただ彼女のなかで、気持ち冷めてしまったということらしかった。池田はもうそれ以上彼女を引き止めようとは思わなかった。一度引き止めてダメだったのだから仕方がない、と思った。それに無理に引き止めたりしても、自分が惨めになるだけだと判断した。

池田がそう言うのと、藤崎さんは感心した様子で頷いた。

「池田くんは偉いなあ。潔いと思うわ。…わたしやったら、たぶん、未練たらたらやで。きつと」

「冗談めかしてそう言った彼女の声は、でも、どこか哀しそうだった。

その言葉から何かを感じ取った池田は、「もしかして、藤崎さんもわかれたばかりとかなん？」と、試しにからかうような感じで尋ねてみた。

すると、水面に一滴の滴を零したときのように、彼女の顔の表面に哀しみがさあつと広がっていくのがわかった。彼女はテーブルの上の飲み差しのコーヒーを手にとってそれを少し口に含むと、口元の隅でちよつときこちない感じに微笑んだ。そして、

「…そうやねん。実はな、わたしも別れたばかりやねん」と、哀しみを誤魔化そうとしてか、明るい声で答えた。

「…わたしな、浮気されとってん。…それが原因で別れたんやけどな、最近なつて別れるまで、そのことに全然気がつかへんかってん。

それも一年近く浮気されとっただらしくてな…もう笑うやろ？」

池田はどう答えたらいいのかわからなかったから、黙っていた。

藤崎さんは視線をテーブルの上に落とすと、話すべき言葉を見失ってしまったように黙りこんでしまった。池田は何か言おうと思っただけで、でも適当な言葉が思い浮かばなかった。しばらくの沈黙のあとで、また藤崎さんが口を開いた。

「しかも、その浮気相手っていうのがな、わたしの親友だったりするんで。…それ知ったときは、自分のアホさ加減に何も言われへんかったわ」

そう言って、藤崎さんは少し無理に笑った。「…自分のすごい身近なひとと浮気してんのに、それに気がつかへんなんて、わたし終わってるよな」

池田はどうリアクションしていいのかわからなかった。少し迷ってから、「でもそれってちょっとひどいよな」と、慎重に言葉を選びながら言った。

「…なんで藤崎さんの彼氏はそんなことしてんやろ。…浮気するにしても、何も藤崎さんの友達とすることないのにな」

池田の言葉に、藤崎さんは何かを諦めたような、ちょっと寂しそうな微笑を浮かべた。それから、彼女はとなりの窓の向こうに視線を向けると、そのまましばらくの間黙っていた。池田は彼女の視線を辿るように、窓の外に視線を向けた。

暗闇のなかで、信号が青から赤に変わろうとしていた。通り狭んだ向かい側にはマクドナルドがあって、その看板がライトアップされているのが見えた。目の前の道路を長距離トラックがすごいスピードで走りすぎていった。

「…わたしな、ずっとそのひとと結婚するつもりでおってん。…今思うとバカみたいやねんけどな、そのひとは結構長い付き合いやったしな…だからな…そんなひどい裏切られ方されてんのに、まだ忘れられへんかったりすんねん…ホンマ、アホらしいんやけどな」

藤崎さんは窓の外に視線を向けたまま、そうぼんやりとした口調で言った。少し弱い声だった。池田は何と言ってあげたらいいのかわからなかった。

「…でもまたいいことあるで」と、池田は気休めにもならないとわかりながらもそう言ってみた。池田としてはできるだけ彼女を励ましてあげたかった。

藤崎さんは池田の方にちらりと視線を向けると、「そうやね」と、いくらか哀しみを引きずりながらも小さく微笑した。

店を出たときには、時刻はもう午前三時を少し回っていた。結構長居してしまったな、と池田は思った。

帰りの車のなか、あまり会話は弾まなかった。お互いに、それぞれの思考のなかに沈み込んでしまっている感じだった。

藤崎さんが口を開いたのは、あともう少しでさっきのビデオ店に着くという頃になってからだった。

「さっきはごめんな」と、藤崎さんは謝った。何のことなのかよくわからなくて、池田は横目でちらりと彼女の方に視線を向けた。

すると、彼女は、「…久しぶりに会ったのに、ちよつと重かったよな。あんな話するつもりじゃなかったん」

と、言い訳するように言った。

池田は咄嗟に言葉が出てこなかったけれど、「べつにそんなことないで」と、できるだけ優しい口調で言った。「俺も彼女に振られた話したんやし」

池田がそう言うと、藤崎さんは何が可笑しかったのか、少し小さく笑った。そして、「お互い色々上手いかへんよな」と、弱い声で言った。「仕事のこととか色々…」池田はちよつと考えてから、「確かにな」と、頷いた。

「…わたしな、いつもはそうでもないんやけどな、ときどき落とし穴に落ちたみたいに寂しくなってしまうことがあるねん。それはべつに彼氏と別れたからとかじゃなくてな、もつと漠然とした、対象のない寂しさやねん。それですごく落ち込んでしまったりする」

信号待ちで止まったときに彼女の方に視線を向けてみると、彼女は車の窓に頭をもたせかけて、哀しそうな顔をして外の景色を眺めていた。

「でも、それは誰でも同じやで」と、池田は言った。

すると、藤崎さんは意外な言葉を耳にしたように、振り向いて池田の顔に表情のない視線を彷徨わせた。信号が青に変わったので、池田はアクセルを踏んだ。

「俺もたまにめっちゃ寂しくなったりすることあるで。…やっぱりとりでずつと勉強してるとな、なんかしんどくなったりすることがあるねん。絶対結果出せるとは限らへんしな。…そういうときはすごく寂しくなったりするで」

彼女は黙って池田の顔に視線を注いでいたけれど、ふっとその口元を緩めて、「池田くんもそんなこと思ったりすんねん」と、意外だというよりは感心した様子で頷いた。

池田はちらりと彼女の方に視線を向けて、「俺、結構寂しがり屋やったりするしな」と、冗談めかして言った。すると、藤崎さんは可笑しそうに口元を綻ばせた。

「でも俺はそういうときは無理に逆らわんと、流れに身を任せることにしてんねん」と、池田は正面に視線を戻しながら言葉を続けた。

「流れに身を任せる？」と、藤崎さんは繰り返した。

「…なんて言うんやろ」どう表現したらいいのかわからなくて、池田はちよつと眉をしかめた。「落ち込んでるときってな、ついつい落ち込んでしまってる自分を責めてしまうやん。何こんなことで俺は落ち込んでるんやろって。でもそんなことしてもな、よけいに気持ちが悪くなるだけやと思うねん。だからな、そういうときは何も考えんと、落ち込んでしまえるだけ落ち込んでしまうことにしてんねん。その方が、底から浮かびあがってくるのも早い気すんねん。…まあ、ひとにもよるんやろうけどな」

藤崎さんは池田の言葉にしばらくの間黙っていたけれど、「そうかもしれへんな」と、何か考え込むような表情を浮かべて頷いた。

「とにかくな」と、池田は言葉を続けた。「俺はこう思うことにしてんねん。何かめっちゃ哀しいことがあったあとにはな、それと同じくらいめっちゃ嬉しいことがあるんやって。…世の中そんな単純じゃないと思うけどな、少なくともそう思うことによって、気持ちがちよつと楽になんねん。ああ、こんなひどい目にあったんやから、また次いいことはあるわって」

そう言ってしまったから、池田はちょっと照れくさくなって笑った。すると、つれられるようにして藤崎さんもちょっと笑った。

藤崎さんとはレンタルビデオ店の前で別れた。

彼女は自転車に乗って帰っていった。ちよつと心配になつて送つていこうかと言つただけけれど、彼女はひとりで帰れるから大丈夫だと答えた。

彼女の姿はすぐに夜の闇に溶けるように見えなくなつてしまった。池田は彼女の姿が完全に見えなくなつてしまつてから、車を走らせた。

帰り際に、藤崎さんとはお互いの携帯番号とメールアドレスを交換した。

家に帰ってから、池田は彼女と話した色々なことを思い出した。そしてそれから、彼女のあの哀しそうな表情を思い出した。池田はふと思いついて、彼女のメールアドレスを画面に表示させた。何か彼女にとって少しでも励ましとなるような言葉を送りたいと思った。池田はしばらく迷つてから、こうメールを送った。

嫌なことも色々あると思うけど、まあ、元気だしてな。何もしてあげられへんけど、話し聞くことぐらいやったらできると思うし、いつでも電話なり、メールなりしてください。

そのメールに対して、すぐに返事は帰ってきた。彼女はメールの

なかで、おかけでたいぶ気持ちが楽になった、色々ありがとう、と書いていた。そしてそれにつけ加えるように、池田くんも早く前の彼女のことが忘れられるといいな、とも書いていた。

池田はそのメールを二度読み返してから、携帯を机の上に置いた。

池田は机の上に問題集を広げた。部屋の時計に目をやると、もう時刻は五時を回ってしまっていた。

「さてやりますか」と、池田は声に出して呟いてから、シャープペンシルを手に持った。勉強を開始する時間はいつもよりまだいぶ遅くなってしまうていたけれど、それでも何もしないよりはマシだろうと判断した。とにかく、十一時まで気合いを入れて頑張ってみようと思った。

ふと、窓の方に視線を向けると、閉じられたカーテンの隙間から、朝日のやわらかい光がそつと静かに差し込んできていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7296c/>

池田を巡る恋愛。

2010年10月21日23時56分発行